

## 秋季大会シンポジウムを振り返って

品 田 悦 一

上代文学会主催のシンポジウムが秋季大会の初日に組み込まれてから、早くも七回目を数える。今回のテーマ「『日本』意識の形成をめぐる」は、前々回の「生きてゆく古代文学」、前回の「万葉集の近代」に引き続き、研究の基盤を問い直す企画と言えよう。講師には神野志隆光・前田雅之・大津透の三氏を招き、二〇〇三年十月十八日（土）午後二時より、東京大学本郷キャンパスで開催された。

天候はあいにく雨模様だったが、会場の法文二号館三番大教室には、当初から二百名を超える聴衆が集まった。近來にない大入りである。趣旨説明・講師紹介に続いて三氏が三十分ずつ講演、休憩を挿んで行なわれた討論も活発なきわめ、気づいたときには予定の五時半を回っていた。

なお、当日の司会は鉄野昌弘氏が担当する予定だったが、

急病で果たせなくなったため、急遽私が代役に立った。鉄野氏はシンポジウム担当委員として今回の企画立案を主導し、講師三氏ともあらかじめ会合を持って、綿密な打ち合わせを済ませていた由だが、編集担当の私はほとんどぶっつけ本番で臨まなくてはならなかった。どうか役目だけは果たしたものの、いざれ劣らぬ能弁家の議論を取り捌くのに追われ、まともにメモをとる余裕すらなく、ましてこの文章を書く役が回ってくるとも思っていなかった次第である。当日は梅田徹・木村一弘・工藤京子・工藤進の各氏から質問票が寄せられ、それとは別に河添房江氏ほか何名かが質問に立って、討論を盛り上げたのだが、遺憾ながら諸氏の発言を正確に再現することができない。この点不手際をお詫びするとともに、以下の記述が私の個人的感想にとどまることをお断りしておく。

さて、せっかくの盛會に水を差すようで気が引けるのだが、今回のシンポジウムはどうも企画倒れだったように思えてならない。もちろん個々の講演はそれぞれ力のこもったものだったし、随所に新たな知見や提言を含んでもいた。そのことは本号の誌面からも確認できるはずである。が、各氏の議論が補い合つて、または対立することを通して、「日本」意識の形成」についてのなんらかの認識の深化をもたらしたかといえ、とてもそうは思えない。そもそも「日本」意識」とはどのような意識のことなのか、またその「形成」をどのような次元で問うのかといった、もっとも肝心な点についてさえ、共通の了解といえるものが欠落していたと言わざるをえない。

総合することの困難な三氏の議論にあつて、唯一共通していたのは、網野善彦氏の見解に追隨しまいとする態度ではなかったか。網野氏の見解とは次のようなものをさす。

あらためて強調しておきたいのは、「日本人」という語は日本国の国制の下にある人間集団をさす言葉であり、この言葉の意味はそれ以上でも以下でもないということである。「日本」が地名ではなく、特定の時点で、特定の意味をこめて、特定の人々の定めた国家の名前——国号である以上、これは当然のことと私は考へる。それゆゑ、日本国の成立・出現以前には、日本

も日本人も存在せず、その国制の外にある人々は日本人ではない。「聖徳太子」とのちによばれた厩戸王子は「倭人」であり、日本人ではないのであり、日本国成立当初、東北中北部の人々、南九州人は日本人ではない。〔 〕近代に入つても同様である。江戸時代までは日本人でなかったアイヌ・琉球人は、明治政府によつて強制的に日本人にされ、植民地になつてからの台湾では台湾人、朝鮮半島では朝鮮人が、日本人となることを権力によつて強要されたのである。〔網野善彦「日本」とは何か〕二〇〇〇年、講談社、八七ページ〕

アジア大陸の北と南を結ぶ懸け橋であるこの列島で営まれた人類社会の深く長い歴史を背景に、日本列島にはたやすく同一視することのできない個性的な社会集団、地域社会が形成されてきた。それを頭から追究可能なアイデンティティーを持つ「日本人」としてとらえ、その文化、歴史を追究し、その特質を論じようとする試みは、「日本国」——国家に引きずられた架空の議論であり、本質的に成り立ちえない。実際、こうした「日本人論」「日本文化論」は否応なしに、多様な社会集団や地域社会を無視し、その多くを切り落とした歪んだものになるか、前にくわしくのべたように、

「孤立した島国」「瑞穂国」「単一民族」などの根拠のない「虚像」をつくり出すか、あるいはついに事実を追究することを放棄し「神話」「物語」によってアイデンティティーを捏造するか、いずれにせよ事実に即した「日本論」としては成り立たない議論とならざるをえないのである。(同書三三三ページ)

「日本」という想像の共同体をあたかも歴史貫通的な実体的ように見なす発想は、単に目下の通念であるにとどまらず、制度化された歴史教育を通して——国語教育も中断——若い世代の脳裏に日々刷り込まれてもいる。網野氏は、こうした発想や制度、またそれを支える自閉的歴史観を厳しく斥けつつ、埋もれた過去を積極的に掘り起こすとともに、そこにはらまれていた種々の可能性を汲み上げ、その作業を通して人類史の新たなステージを展望してみせる。網野史学が読者を惹きつけてやまないのも、この、倫理的ともいうべき使命感が記述を常に裏打ちしているからだと思ふ。じつさい、千年、二千年というスパンで物を考えれば、「日本」に始まりがあったように、終わりがあることも当然であって、同じことは「アメリカ」「フランス」等々にも当てはまるだろうし、「ソ連邦」には現に当てはまったのだった。逆に言えば、国家の有限性にかんする想像力が成熟してきたときにこそ、はじめて人々の共同性が

地球規模で実現される条件も整うだろう。網野氏の言う「人類史の壮年期」を、私は以上のように受け止める。

その上であえて言うのだが、氏が「日本人」を「日本国の国制の下にある人間集団」と定義したことは、通念との奇妙な妥協であり、論調の捻れだったと思う。同一の「国制」に包摂されたからといって、人々はそれだけの理由で自分たちを一体の「人間集団」と意識するものではない。牧場主が「うちの家畜」と見なすからといって、その牧場の牛や馬や羊が互いを仲間とは決して考えないように、下々の民が国家への帰属意識や、国家規模の共属意識を持ち合わせていないという状態は、程度の差こそあれ、前近代の身分制社会にはどこまでも付きまといたはずだ。「日本人の自己認識の出発点」を国号の定まった七世紀末に求める(前掲書二一ページ)のは、支配層や知識層にならともかく、大多数の「日本人」には妥当しない議論だろうし、直接の「出発点」は日清・日露戦争が経験された十九世紀末〜二十世紀初頭か、せいぜい学制の施行された一八七三(明治六)年あたりに求めるべきだろう。北海道や沖縄の人々だけでなく、内地の住民の大多数もまた、そのとき「日本人となることを権力によって強要された」のである。もとより剥き出しの暴力ではなく、教育がその有効な手段となった。

講師陣の議論に戻ろう。

神野志氏と前田氏の立論は、扱う時代は異なるものの、ともに、「日本」がどのように「表象」されたかをテキスト群に即して分析するものだった。

神野志氏が『日本書紀』と『古事記』に見る国号を問題にしたとき、念頭にあったのは、おそらく網野書の次のような記述だったろう。

この国号〔日本〕はまさしく「分裂症」的であり、中国大陸から見た国名であった。〔……〕延喜四（九〇四）年の講義のさいにも、「いま日本といっているのは、唐朝が名づけたのか、わが国が称したのか」という質問が出たのに対し、そのときの講師は「唐から名づけたのだ」と明言している（『積日本紀』）。〔……〕もとよりこれは『旧唐書』の記事などから見て明白な誤りであるとはいえず、平安時代中期、すでにこうした誤解が学者の中にも生れている点に注意すべきで、それは「日本」という国号自体の持つ問題であったといわなくてはならない。（前掲書九三ページ）

唐朝命名説を「誤解」ではないとする神野志氏は、『日本書紀』の「日本」は朝鮮諸国に対する大国的地位を顕現する意味をもち、中国の資料に依拠した箇所では国名が「倭」に据え置かれていることを指摘する一方、『古事記』

には「日本」の用例が皆無であり、国名「倭」の表記が口頭言語の次元での「やまと」を後ろ向きに成り立たせているとする。ほぼ同時代に成立した二つのテキストにこれだけの相違がある以上、『日本』意識をダイレクトに問うことなど不可能である、というのが氏の基本的スタンスらしい。

中古・中世の和歌起源説を扱った前田氏の立場も、巨視的にはこれに近いと言えるのではないか。『古今和歌集』仮名序が「和歌は天地開闢とともに発生した」と書いてしまったことが発端となって、普遍的なものの成り立ちと固有のものそれぞれをどう整合させるかというアポリアが生じ、形而上学的ともいえるべきもろの解釈が案出され、ついには全世界が「日本」に繰り込まれてしまうような表象すら現出した。前田氏はこの動向を、「和漢」的世界像ないし「三国」的世界像に媒介された「日本意識」生成更新の過程と捉える。この場合、国制や社会の実態ではなく、『古今集』という一聖典が「日本」という表象の源泉だったことになる。

これら二氏とは異なって、歴史家である大津氏はあくまで日本の政体を問題にし、平安前期を「古典的国制」確立期とする吉田孝説を援用しつつ、その時期を撰関期にまで繰り下げるべきことを主張する。「小帝国」を志向したと

される日本の律令国家は、帝国の理念である中華思想を實際にはかなり矮小化して継受せざるをえなかったのであり、特に諸蕃・夷狄との関係において王化思想が欠落していたのは、朝鮮半島を版図の一部とする構想が当初から存在しなかった点に関わるという。この指摘は、文学研究者が今後『古事記』や『日本書紀』を読む際にもぜひ考慮に入れるべきものだろう。均一な「日本」はいつ、どのようにして成立したか、というのが大津氏の問題設定なのだが、氏の言う「均一性」は事実上、統治制度の均一性を意味しており、網野氏が批判する「日本社会の均一性」とは次元が異なることに留意しておきたい。

さて、まとめようのないこの文章を、無理にでもまとめなくてはならぬ。いっそ投げ出してしまおうかとも思ったが、それではあまりに芸がないから、代わりに「ちよつといい話」を書きつけておこう。

高等学校で最後に受けた数学の授業が、四半世紀を経た今も忘れられない。すてきに感動的な授業であった。担当のI先生が「今日は最後だから、ひとつ変わった問題を解いてもらおう」と切り出し、こう板書した。「任意の円Oに任意の直線 $l$ が交わっているものとする。このとき、二つの交点 $p$ 、 $q$ を両端とする線分が、円Oの半径より長く

なる確率を求めよ」。

数分後、指名された一人が黒板に進んだ。一方の交点を固定して直線を百八十度回転させてみる。まんなかの百二十度分の範囲で条件を満たすから、答えは $2/3$ 。「なるほど。ほかにないか」。別の一人が指名された。今度は直線を平行移動させて考える。線分 $p$ 、 $q$ が円Oの半径に等しいとき、三角形O $p$ 、 $q$ は正三角形となる。条件を満たすのは線分 $p$ 、 $q$ がこれより点Oに近い場合なので、点Oから正三角形の底辺に下ろした垂線の長ささと半径との比を求めると、答えは $\sqrt{3}/2$ 。「よろしい。まだないか」。まだあった。さっきの正三角形の垂線を三百六十度回転させると、円Oより一回り小さな円ができる。線分 $p$ 、 $q$ の midpoint がこの円の内側にあるとき条件を満たされる。二つの円の面積の比を求めれば、答えは $3/4$ 。あいた口が塞がらなかった。

「どうだい。不思議だろう。答えが三つも出てしまった、どれも正しそうではないか。なぜこんな結果になったかというところだ、無限という領域を不用意に相手取ってしまったからなのだ。このことの意味をよく考えてもらいたい。すぐに分からなくても、いつか分かる日が来るはずだ。では、少し早いですが、卒業おめでとう」

先生はそう言うのと、すたすた教室を出て行ってしまった。